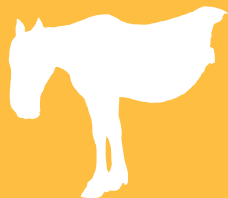


平成29年度事業報告
2017.4-2018.3



KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO. 35

神田日勝記念美術館だより





一年を振り返って

神田日勝記念美術館 館長 小林 潤

四半世紀を迎えようとする当館の一年は、求められる神田日勝調査研究への思いを抱きつつ瞬く間に過ぎた。

今年の大きな出来事として、日勝31歳の頃の新発見作品《静物》の寄贈が上げられる。寄贈者は広尾町在住の栗栖正行氏（嘗て鹿追町在住）。また江別市在住の某氏より日勝作品の寄託申し入れがあった。ご両人ともにご自宅にあるよりも沢山の人々に見てもらえることを望んでのご寄贈とご寄託。両作品ともに誠に有り難く、ご厚志に沿うよう展示の機会を企画している。

さて、平成29年度は世界的現代美術家の奈良美智氏にご講演いただく機会に恵まれ多くの奈良美智ファン・神田日勝ファンにお越しいただいた。また、同氏は先んじて北海道新聞社の取材に神田日勝の魅力を語られた。「見た瞬間

にすごいと分りました」「神田日勝は沈黙で語っている。騒いでいるものがない」と。これらの評は没後間もなく50年を迎える神田日勝とその世界に、新たな時代の新たな視点を加えて頂いたものとして大切にしたい。

展覧会事業では全道展所属の重鎮で構成する「権展」が人気を博した。「菅訓章氏を偲ぶ・十勝の美術作家展」における作家同士のつながりで作り上げられた展示空間は、明日の十勝の新たな芸術文化創造活動に向けての確かな一歩となった。

また、日勝祭では生誕80年を迎えた日勝と同年の小檜山博当館名誉館長による講演は「現代社会に生きる」と題して土に生きた日勝の作品評であり、改めて日勝の世界を顕彰する時間となった。

迎える平成30年度は当館開館25周年にあたる。開館以来多くのファンに支えられて運営してこられたことに感謝し、更なる高みを目指したい。



「本物」の底力

NHK帯広放送局 局長 山本 健一

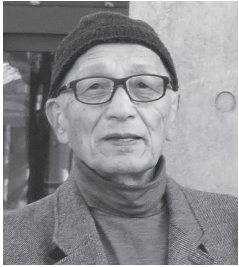
8月の馬耕忌、祭壇上の日勝さんはいつも野の花に囲まれて、穏やかに笑っています。色とりどりの野の花は、町の方が

ボランティアで摘んできて、飾り付けてくれるのだと伺いました。2016年は、相次ぐ台風で大方の草花がなぎ倒されてしまった直後でしたが、なんとか集めてきたセイタカアワダチソウが日勝さんを取り囲んでいました。心尽くしの黄色い祭壇が目には沁みました。馬耕忌にお邪魔していつも感心するのは、この祭壇から講演会やシンポジウム、懇親会にいたるまで鹿追町のみなさんが手弁当で支えているということです。いかに日勝さんを大切に思い、誇りにしているかが伝わってきます。そして、トリを飾る田中光俊さんのギター演奏「禁じられた遊び」を聞きながら毎回思うのです。「こんなに幸せな画家が他にいるんだろうか」と。

もちろん、日勝さんが大好きなのは町の人だけではありません。2017年の馬耕忌には、現代美術家の奈良美智さんが講演に来てくれました。「奈良さんと日勝さん？」作風が全く違うので、正直意外に思いました。でも講演をお聞きして得心しました。奈良さんは故郷・弘前の昔の写真

を紹介しながら、日勝さんの作品世界が自分の原風景と近いことを語ってくれました。およそ40年前に大学の友人の「谷野君」から日勝さんを紹介されて以来、ずっとファンだったことも明かしてくれました。そういえば、人気バンド「サカナクション」のヴォーカリスト・山口一郎さんも美術専門誌のインタビューで、日勝ファンであることを熱く語っています。時代の最先端を疾走するアーティストたちも、日勝さんの「現実を見つめる内省的な深い眼差し」や「手ざわりすら感じられる確かな生活感」、「骨太な存在感」に魅入られているんですね。「隠れ日勝ファン」はいたるところにいて、私たちがまだまだ発掘しきれていないだけなのでしょう。

再来年2020年には日勝さんの没後50年を迎えます。東京駅の東京ステーションギャラリーなどで大規模な回顧展を開催する計画が進んでいると伺っています。東京に暮らしていると、自分の足は地面に着いているんだろうかと不安になったり、めまぐるしく変わる風景や価値観にうろたえたりします。オリンピックに沸く東京に、腹にズシーンとくる北の大地の本物をプレゼントしようではありませんか。



一菅 訓章氏を偲ぶ・ 十勝の美術作家展を終えて一

全道美術協会会員 渡邊 禎祥
独立美術協会会友

「菅さん～ん！今どこに居ますか？」「ここでなくて日勝館の屋上ですか？」と町民ホールの高い天上を見上げて、ぼくはオープニングセレモニーの冒頭ですっかり高揚してしまいました。偲ぶ展を終えて3ヵ月経過しても未だあの時の余韻が残っています。

菅さんは2016年1月11日、不条理にも65歳の若さで黄泉への旅立ちとなりました。その訃報は道内外に報じられ、我々美術仲間も大変な衝撃を受けました。菅さんはご存知の如く神田日勝記念美術館開館後も、バイタリティーの方で、館での企画展等の初日以外は職員スタッフに一任して館長室はいつも留守だったことが記憶に新しいのです。つまり菅さんは次の神田日勝と関連させる企画展の構想の為にも道内外での公募団体展、美術館巡りや画廊訪問等々で作家含めて広く人脈を深められ、その半ばでもありました。菅さんの行動力は管内作家の活躍を心より応援下さり克明に個展会場並びに団体展での入選作を観覧し、その取材活動にも我々作家仲間がいつも熱く厚く感謝申し上げて参りました。

そこで菅さんの訃報を知らされ、「全く予想もしないことで、大ショックです」とぼくに電話を頂戴したのが、札幌の北都館ギャラリーのオーナー松浦芳博氏でありました。松浦氏のお言葉では「菅さんは札幌に見えたら必ずご来店下さり展示作品を丁寧に観て、『今日これから東京へ行きますので』と急いでお帰りになる館長さんでした」と幾度も伺ったことが印象に残ります。偶然なことで

したが、同年8月1日よりぼくは1ヵ月間の会期で初めて北都館（小部屋）で個展の開催を決めており、その準備と打ち合せ後に松浦氏より「生前のご厚情に感謝し、是非8月中に十勝のゆかりの画家10名ほどの作品展示で、菅さんを偲びたい」との熱いご要望をお受けし、出品作家も一任され神田絵里子さんはじめ10名の仲間（会期8月10日～15日）開催。鹿追町の関係者はじめ多数の皆さんにご高覧頂きました。

北都館ギャラリーでの菅さんの小さな追悼展は、既に地元十勝にも情報が流れ、地域の美術振興への偉大なるご尽力に感謝し、仮称「菅さんを偲ぶ展」を是非鹿追町で開催しようとの気運が高まり、北都館での企画に係わったことで僭越ながらその推進役を賜りました。同年9月下旬より準備会が設けられ、小林館長はじめ武田友の会会長に支援をお願い致しまして、実行委員会（41名）が立ち上がり、意欲的な素晴らしい構成メンバーで推進されました。タイトルは「菅訓章氏を偲ぶ・十勝の美術作家展」として開催され、菅さんの「粹」なき交友を広げた人柄は勿論であり、我々十勝の作家仲間も、共通理解を共有し所属団体等の垣根を越えて39名の作家が一堂に賛同できたことは、菅さんも黄泉の彼方から喜んでくれたと思います。千名を上回る観覧者の皆様と、神田日勝記念美術館、多くの関係者に心から感謝申し上げます。

<実行委員長>

新収蔵品 紹介

作品所蔵者のご厚意により、平成29年度には油彩画2点の寄贈、油彩画1点の寄託がありました。（2月28日時点）
これらの作品については、平成30年度第1期常設展（4/24～6/10）にて公開予定です。

■寄贈



神田日勝《静物》1968年
油彩、ベニヤ 14.3×18.5 cm (0号)
寄贈者:栗栖 正行氏

■寄贈



蛭子善悦《ヴェネチア》1977年
油彩、キャンバス 45.5×38.0cm (8号)
寄贈者:太田 敏雄氏

■寄託



神田日勝《風景》1960年代後半
油彩、ベニヤ 15.8×22.7 cm (SM)

燃え上がる大地

神田日勝

平成29年度特別企画展



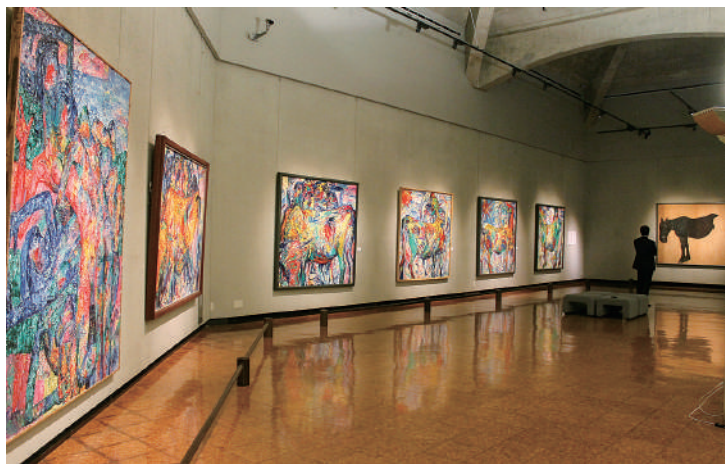
図1.《人と牛D》1968年 北海道立近代美術館蔵

神田日勝の作品は、身体に胴引き跡を残した農耕馬をはじめ、身近な家畜や食糧、新聞やポスター等が細部にいたるまで丹念に描き上げられていることで知られています。一方、1968年、69年には、《人と牛D》(図1)をはじめ、「人と牛」や「人間」、「作品」と題した抽象表現主義風の作品群を手がけています。これらの作品は、従来の作品の印象とは打って変わって、大胆なデフォルメと鮮烈な色使い、そして豪快な筆触による躍動感あふれる画面を特徴としますが、これまでは試行錯誤期、あるいは逸脱期の産物としてあまり注目されず、主要作品からは外されがちでした。

本展は、これら画業後期の作品群から、新たな試みに込められた画家の想いとその表現の魅力に迫ることを目指しました。前半には《牛》(図2)や《死馬》など代表作としてよく知られる写実的な画風の油彩画を、後半に大作9点、小品1点の抽象表現主義風の油彩画を展示し、その対比をご覧くださいましたが、全10点が当館に出揃うのは初の機会となりました。

牛が描かれた2点、《牛》と《人と牛D》と比較すると、《牛》では部分的に取り入れられた赤・青・白の原色が《人と牛D》では全面にあらわれ、薄塗りだった画面は、絵の具の塊と豪快な筆触によってダイナミックな画面に様変わりしています。1968年に「人と牛」のAからDまでの4点に加え、「人と馬」を描いた《晴れた日の風景》が全て一年のうちに描き上げられ、その翌年には男女や家族をテーマとした《人間A》(図3)や《作品C》(図4)が展開しました。

当時は抽象表現主義の興隆期であり、画面からもその強い影響が看取できますが、既に全道展会員に推挙され、次に独立展という大舞台での活躍が目指されたために、能動的・戦略的にその技法の採用が試みられたのではないのでしょうか。画面を走るナイフの勢いや、煌々と燃える炎を思わせる色彩からは、新たな表現様式から新境地を目指さんとする画家の強い向上心が感じられます。また、度重なる冷害と不作(※1)の苦しい年月を経て至った表現であることを踏まえると、陽光を浴びて生命が歓喜に沸く様子を描いた復興の絵と捉えることも出来ましょう。



展示風景

会 期 / 4月25日(火)~7月9日(日)
会 場 / 神田日勝記念美術館
入場者数 / 2,506名

従来のような試行錯誤や逸脱というネガティブな意味合いよりも、むしろ画業と実生活ともに自らの足場が築かれていく確信を得て、新たなステージへの飛躍を目指して描かれた渾身の「決意表明」として本作品群を観ると、その力強い迫力や瑞々しいエネルギーが際立って感じられます。この2年間に生み出された作品は一見異質に思われますが、その実、

その時々^{かお}の画家の心持が素直に、澆刺と表現されたものと言えます。野心的で猛々しい、神田日勝の新たな貌を垣間見ることのできる展覧会でした。

※1 初めて公募展に出品をした1956年から1970年までの間に、1956年、1964年、1966年と3度の大きな冷害と不作に見舞われています。特に1964年は「十勝大冷害」とされ、甚大な被害をもたらしました。



図2.《牛》1964年 当館蔵

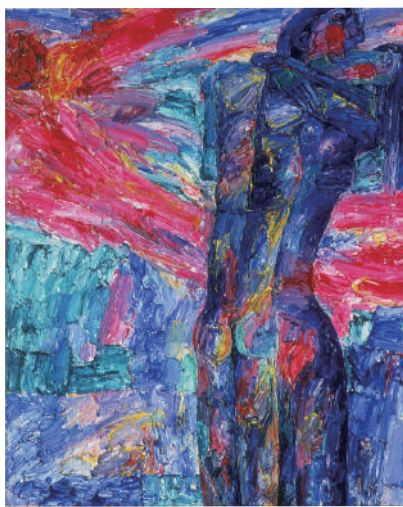


図3.《人間A》1969年 当館蔵



図4.《作品C》1969年 当館蔵

G 関連事業 Gallery Talk

- I 5月7日(日) 11:00~11:40 「見どころ解説ツアー」
- II 6月3日(土) 14:00~14:40 「画家が見ていた『本当の色』とは？」



無料音声ガイド(iPod touch)の運用

北海道帯広緑陽高校放送局の高校生9名の皆さんに全13トラックのナレーションを担当いただきました。

<展示室照明をLED化>



ギャラリー・トークIIの様子

5月に新たに導入されたLEDのスポットライトと従来光とを比較し、それぞれの色の見え方の違いを検証するギャラリー・トークを行いました。従来の白熱球のスポットライトは、照度を低くすると赤味を帯びるため、特に青・緑・白が損なわれがちでした。このたびのLED化によって見え方が改善され、作品本来の色彩に近い状態でご覧いただけるようになりました。



《晴れた日の風景》1968年 当館蔵



同左

平成29年度常設展 神田日勝のデッサン

part
1

会期：7月11日(火)～
11月19日(日)
会場：神田日勝記念美術館
入場者数：4,068名

part
2

会期：11月21日(火)～
4月22日(日)
会場：神田日勝記念美術館
入場者数：666名 (3月31日時点)

神田日勝が描いたとされるデッサンは、総数200点あまり現存しており、大半がノートやスケッチブックに描かれています。こうした「デッサン帳」は全9冊にわたり、普段は御遺族の元で大切に保管されています。

本展では、御遺族の協力のもと、デッサン帳に収録される多数のデッサンを1期と2期に分けて紹介しました。デッサン帳には油彩画の下絵が多数収録されており、下絵と完成作を比較すると、構図やモチーフの変化に神田日勝の試行錯誤のプロセスを見て取ることが出来ました。

その一例として、画業初期の代表作《ゴミ箱》(1961年、図1)の制作プロセスが、次のデッサンとの比較によって浮かび上がりました。本作の画面右手の「ゴミ箱」底部には、大きな車輪を描いて上から塗りつぶした跡が確認できますが、デッサン帳の下絵(図2)との比較から、当初「荷車」だったものを途中で「ゴミ箱」に変更したことが窺えます。この下絵(図2)の左手にも薄くドラム缶が描かれていますが、当館収蔵品のデッサン《男》(図3)と比較すると、

構図はそのままに、ドラム缶が人物に取って代わったかのように見えます。さらに拳を握り、足先を開いて直立する人物像は、《トラックと人》(図4)や《馬と人》(図5)など複数のデッサンに登場するモチーフであり、それぞれ荷車ではなく、トラックや馬の親子とともに描かれています。一連のものとして並べると、《ゴミ箱》にいたるまでの試行錯誤のプロセスが浮かび上がって見えてきました。

図3～図5のデッサンはこれまで「制作年不詳」とされ、没後それぞれに上記の呼称が宛てられてきましたが、これらが《ゴミ箱》の構想段階のヴァリエーションとして結びつくとすれば、その制作年はいずれも1961年前後のものと推定されます。

本展で紹介したデッサンは未だ一部に留まり、今後もデッサンの整理、分類、分析を目下の重要課題として取り組んでいきます。

※会期中は作品保護のため、約1ヶ月半ごとにデッサン帳のページの入れ替えを行い、額装されたデッサンは原本と複製の入れ替えを行いました。



図1.車輪跡(黄色)

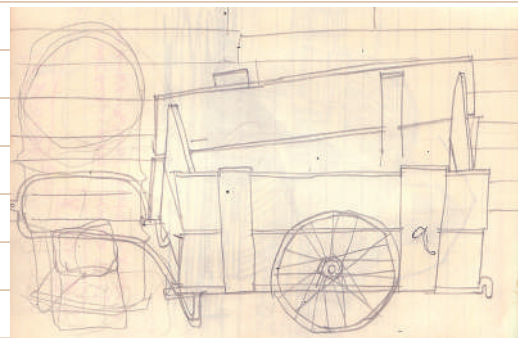


図2

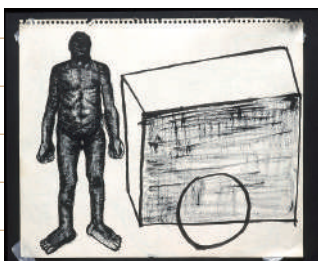


図3



図4

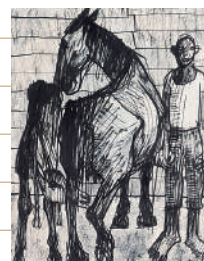


図5

展覧会事業実行委員会主催事業

新収蔵品展

会期：8月8日(火)～8月30日(水)
会場：鹿追町民ホール
入場者数：1,219名

これまでに当館が寄贈・寄託を受けた作品の中から、本展では2011年から2016年までの6年間に新たに収蔵された絵画・版画・彫刻を紹介しました。初公開となる藤野千鶴子の油彩画を始め、26名の作家による29点の作品が展示されました。



第12回 権展

会期：9月1日(金)～9月11日(月)
会場：鹿追町民ホール
入場者数：366名

本展は、梅津 薫、川本ヤスヒロ、斉藤嗣火、田崎謙一、福島孝寿、藤井高志、渡辺貞之ら、全道展で研鑽を積む7名の画家によるグループ展です。会場には120号から150号の大作28点が並びました。



ある日見上げるとりんごが笑っていた —カワシマトモエWORKS

会期：10月3日(火)～11月5日(日)
会場：神田日勝記念美術館
入場者数：1,114名

札幌市在住の作家カワシマトモエの個展を開催しました。りんごや羊、雲や雨をモチーフに描かれた絵画40点が展示されました。階段付近には木製のドアに油絵具で描いた《雨の入口》シリーズ3点が並び、そのユニークな作品世界へと来場者を誘いました。



菅訓章氏を偲ぶ・ 十勝の美術作家展

会期：11月7日(火)～11月19日(日)
会場：鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館
入場者数：1,062名

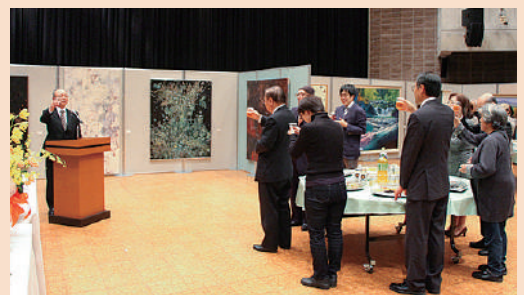
主催：菅訓章氏を偲ぶ・十勝の美術作家展実行委員会



実行委員(50音順)：浅川 茂、浅野公宏、池田 緑、池原良徳、和泉よう子、今西直人、梅津美香、おとひと小笠原洋子、奥秋広美、金澤博子、金子 章、鎌田朝緒、神田絵里子、小林 潤、小室 史、近藤みどり、齊藤隆博、句坂敏郎、さとうえみこ、佐藤美和子、白土 薫、高田健治、瀧川秀敏、田口丞二、武田耕次、田之島篤子、千葉定是、中西堯昭、中谷有逸、浜中正至、本間輝子、宮澤克忠、村上陽一、森 弘志、山田洋子、山平博子、山元 明、脇坂 裕、渡邊禎祥、和田仁智義



2016年1月に逝去した前館長・菅訓章氏を偲び、十勝の有志41名による追悼展が開催されました。初日のオープニング・セレモニー「菅さんを偲ぶ会」には、十勝管内から67名が集いました。



Yoshitomo Nara

第25回 馬耕忌

奈良 美智氏

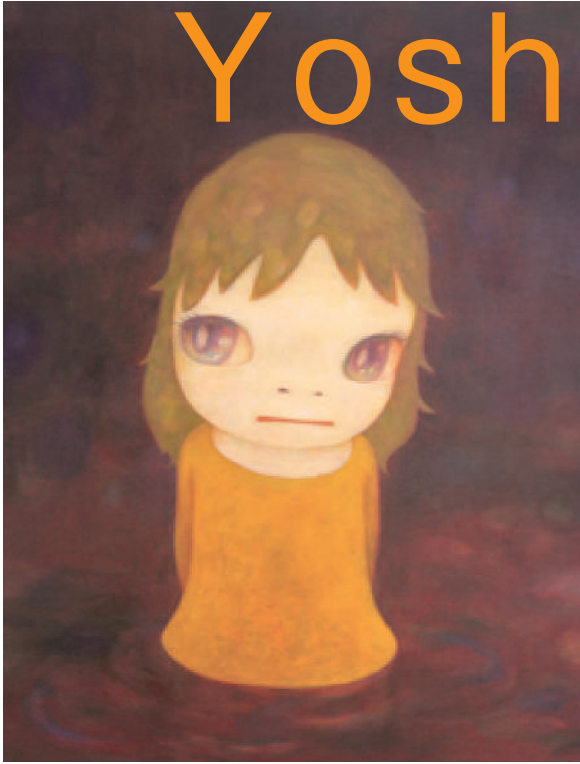
記念
講演会

記憶していくこと、
それを形にすること

会期：8月27日（日）

入場者数：279名

会場：鹿追町民ホール



After the Acid Rain 227.0×182.0cm Acrylic on canvas 2006
©Yoshitomo Nara,2006

北海道十勝平野の大雪山麓にある、人口5600人に満たない鹿追町で奈良美智氏の講演会が開かれた。

奈良美智氏が初めて当館を訪れたのは昨年（平成28年6月）のことであった。

直後の自身のツイッターに「神田日勝は、上京したての18の頃に、同じく十勝から上京してきた友人が教えてくれた画家だ。」さらに、「神田日勝記念美術館で絵を観た。初期の『死馬』と『牛』がやっぱり素晴らしい」、「東京近代美術館に神田日勝の絵が所蔵されていたら、自分が選んだ所蔵作品として麻生三郎と松本俊介の間に展示していたと思う。眼ではなく、肌で感じられるようなリアリズムがある素晴らしい絵なんだ…。」と綴った。

世界で活躍される現代美術家から高く評価いただいたことは当館の事業推進にも大きな力となるものである。

これらの氏の発言が縁で、平成29年8月27日、第25回目となる「馬耕忌」で、待望の奈良美智講演会が実現した。

奈良氏の講演「記憶していくこと、それを形にすること」の中では、今から40年前「神田日勝」という画家の図録を見せてもらい、「絵をみたら、すごく来るものがあった」、「これは自分が知っている世界だ」、「忘れかけていたけれど身体にのこっているものだ」と思ったと回想した。

また、ふるさと青森の原風景や大自然の厳しさに耐えて生きた幼少時からの生い立ち、作品制作のプロセスなども画像をふんだんに使用して紹介された。

質疑応答では、「作品にロックを感じた。音楽と制作の関係は？」の質問に、「キャンバスに描く絵の場合は、『試練』を与えている。（描き始めの状態から）絵が変化していった、『これだ』と思うものが見えた瞬間、完成に向かって描きあげていく瞬間には、実はもう音は消えている。さっきまで爆音でかかっていた音楽が消えても、それすら分らないくらいの状態で、絵を完成させる。そうじゃないと音楽を越えられない気がする。逆に紙に描くドローイングは、音楽を聴きながら描いて、『バカ』とか、言いたいことがすぐに出ちゃう感じ…。」など、どの質問にも飾らずに（聴衆が専門家集団でないこともあり）平易な言葉で聴き手に真摯に向き合う姿勢が感じられて、会場には常に柔らかな雰囲気醸し出されていった。

馬耕忌は、当館のみならず今後の小美術館活動の在り方について考える場でもある。没後50年（2020年）を目前に、神田芸術の高まりを感じつつ開催したが、会場に溢れた全国各地から集った奈良美智ファン・神田日勝ファンから、「これからも美術館の新たな活動に期待しています。」との声をいただいた。

当館を訪れた皆さんが、都会の喧騒から解き放たれ、自然に回帰し生きることへのエネルギーを感じられるような館であり続けなければと再認識している。

神田日勝記念美術館館長・小林潤

本文は『美術の窓 2017年11月号*』に掲載された「視点—第25回「馬耕忌」（奈良美智記念講演会）から」を抜粋したものです。

*第36巻第11号通巻430号（生活の友社／2017年11月20日）



書籍のご案内 奈良さん特集の中で、神田日勝の絵についても触れられています。

『疾駆 / chic 第9号』

(YKG publishing / 2017年7月14日発行)

※神田日勝《牛》(1966年、北海道立近代美術館蔵)が掲載

「…こういう絵があるんだよって人に言いたいことって、あんまりないんだけど、神田日勝はみんなに知ってもらいたい。(中略)本当に短い期間しか描いてなくて、作品も少ししかないけど、すべてが全力投球で描かれたもので、本当に絵が素晴らしい。でも、絵がもう少しダサくても、その生き方を僕は好きだったと思う。」

(「ポートレート02奈良美智第2部 芸術と日々のこと」より/p.66-p.69)



『ユリイカ 8月臨時増刊号 第49巻第13号(通巻706号)』

総特集*奈良美智の世界』

(青土社 / 2017年7月20日発行)

「…神田について語る奈良の表情や言葉には、強い調子と抑揚が感じ取れた。そのとき私がとっさに感じたのは、画家としての奈良の資質は、いわゆる現代美術のようなものよりも、神田のような絵描きに近いのではないかということだった。もっと言えば、神田が描いた腹が引き裂かれた北の荒地の馬のような存在を、奈良は、一見はるかに豊かに見える別の時代に、かつて神田が直面したのとは別のかたちで追い求め、手探るように書いてきたのではないか。そういえば神田もまた、まぎれもない飢餓と渴望の画家だった。」

(榎木野衣「飢餓と渴望の絵(うた) - 奈良美智とあんにやの世界」より/p.146)



第23回 蕪壑祭



会期：6月17日(土)

会場：神田日勝記念美術館・
鹿追町民ホール

入場者数：170名

今年は地元コーラスグループ「そよ風コーラス」を招いて、伸びのある素晴らしい歌声を披露していただきました。「秋風にのせて」など観客が親しみやすい歌を選び、会場が温かい雰囲気になりました。

交流会では友の会会員有志の手作り料理が振る舞われ、ワインを片手にチーズなども味わいながら、和やかなひと時を過ごしました。



第15回 日勝祭



会期：12月8日(金)

会場：鹿追町民ホール・
神田日勝記念美術館

入場者数：43名

「現代を考える」と題して小檜山博名誉館長を招き、講演会を行いました。

神田日勝が描く死んだ馬(牛)、廃屋などは、他の北海道の画家が題材に選ばないものであることに注目し、そこに画家自身の遠い東京での記憶(そこで感じた悲しみや苦しみ、不安、飢え)が表れていると語られました。

その後の交流会では、今年80歳を迎えられた小檜山名誉館長と亡き日勝(昭和12年生まれ)を祝し、皆で特製ケーキを前に笑顔で懇親を深めました。



芸術鑑賞バスツアー

札幌市/北海道立近代美術館
大原美術館展Ⅱ

会期：5月21日(日) 参加人数：35名

2012年以来2度目の道内開催となった「大原美術館展Ⅱ」を鑑賞。

西洋美術を紹介する日本初の本格的美術館として岡山県倉敷市に誕生した大原美術館は多くの注目を浴びており、バスツアーは即満員、人気の高さが伺えました。

藤田嗣治、佐伯祐三、岸田劉生など、大原美術館コレクションの根幹ともいえる1920年代の美術作品の数々を心ゆくまで堪能しました。

第23回

馬の絵作品展

会期：10月3日(火)～10日(火)

会場：鹿追町民ホール



文部科学大臣賞／釧路市立鳥取中学校3年 加納 楓花

今年は学年を通して表現豊かで個性的な作品が数多く寄せられました。

特に馬の背景がしっかり描かれ「風景の中の馬」や「小屋の中の馬」など生活感あふれる馬の様子が表現されていました。また見る視点もだんだん明確になってきています。低学年は楽しさ、中学年高学年は力強さ、たくましさ、中学生は美しさ、

命の尊さなど、何を表現するのが素直に伝わってきました。

日勝作品にはうれいを帯びた目の表現がありますが顔の表情も変化に富んだものが多く、馬の目の輝きは印象的でした。

大切なことは特別な馬の状態ではなく自然な馬の様子を直接観察したり体験したその感動を忘れないことだと思います。

(齊藤隆博審査委員長 講評より一部抜粋)

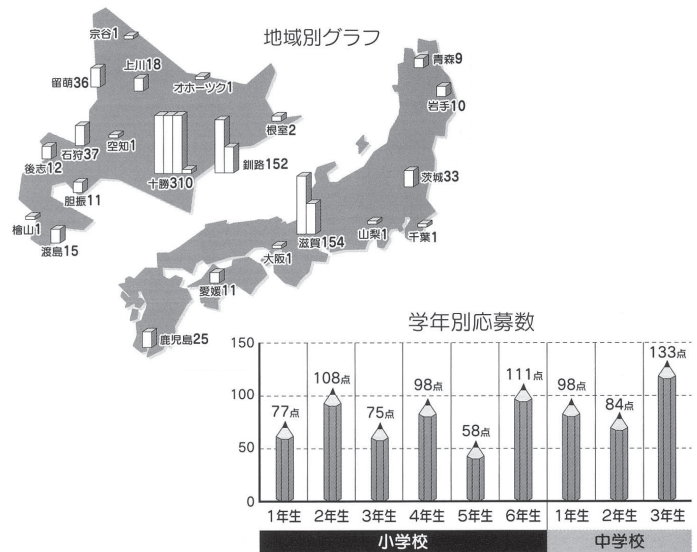
応募点数 842点

審査結果

■入賞

- 文部科学大臣賞
- 北海道知事賞
- 北海道教育委員会教育長賞
- 鹿追町長賞
- 鹿追町教育委員会教育長賞
- 神田日勝記念美術館長賞
- 北海道新聞社賞
- 十勝造形サークル委員長賞
- 帯広市教育研究会工芸美術部会長賞
- JR北海道社長賞
- 北海道電力(株)帯広支店長賞
- 帯広信用金庫理事長賞
- 学校賞
- 審査員特別賞

- 釧路市立鳥取中学校 3年 加納 楓花
- 釧路市立鳥取中学校 2年 一森 彩雪
- 室蘭市立海陽小学校 6年 土井 隆之介
- 室蘭市立海陽小学校 6年 土井 ころこ
- 千歳市立東千歳中学校 1年 森本 桂如
- 中標津町立計根別学園 3年 吉本 萌夏
- 恵庭市立松恵小学校 4年 加藤 沙和子
- 音更町立音更小学校 1年 玉川 凜華
- 小樽市立朝里小学校 2年 山岸 小雪
- 千歳市立東千歳中学校 2年 足立 莉菜
- 釧路市立鳥取中学校 1年 工藤 光永
- 釧路市立昭和小学校 5年 佐々木 美月
- 栗東市立大宝東小学校(滋賀県)



表彰式

10月7日(土)

北海道内外から集まった受賞者は、名前を呼ばれると緊張した面持ちで返事し、登壇していました。時折、笑みを浮かべて賞状を受け取る場面も見られ、受賞の喜びを垣間見ることができました。

展示会場では、全国から寄せられた多くの作品が所狭しと展示され、来賓やご家族、一般の方々も大人顔負けの力作に感嘆していました。



馬の絵写生会

講師／和田 仁智義氏
(平原社展事務局長)

内藤 智香氏
(鹿追町立上幌内小学校)



7月28日(金)

鹿追町ライディングパーク

参加数：22名

町内施設で本物の馬を間近に見ながら「馬の絵作品展」に向けての写生会を行いました。動いている馬を描くことの難しさに苦戦しつつも、講師の先生にアドバイスを受けながらしっかりと馬の顔つき、身体つきの特徴を捉え、馬の絵を描き上げることが出来ました。

合間に乗馬体験を行い、より馬を身近に感じて表現へと繋がられる機会を設けました。

調査報告：《画室A》の図像源について

《画室A》(図1)は、1966年秋の第34回独立展出品作であり、全5枚から成る「画室」連作の一作目です。本作では、従来の落ち着いた色調と写実的な描写とは対照的な、新たな表現様式の確立が試みられました。強調された平面性と画面全体を支配する原色の採用は、以前の作品とは大きく異なる特質であり、ヴィヴィッドな配色と丸や四角のリズミカルな反復が、画面を華やかに彩っています。

制作当時、神田日勝はまだ自身のアトリエを所持していなかったため*1、本作は身近な画材を組み合わせ描いた理想のアトリエ風景だと考えられてきました。また、画中に画家が愛用していたペインティングナイフではなく、絵筆やハケが描かれていることから、「画友の画室に着想を得た」可能性も指摘されましたが*2、その委細な制作背景は不明のままです。

そのような中で、本年の調査活動により、画家の蔵書から、本作と非常によく似た室内の風景を写した写真が発見されました。当該の写真は、美術雑誌『みづゑ』第736号収録の、画家・山口薫のアトリエ写真です(図2)。

両者を比較すると、俯瞰の構図が類似しており、写真に映る箱入りのチューブ絵の具や、溶剤とみられる複数のボトル、筒に差された絵筆やハケ、段ボール箱、額縁、裁ちばさみ等が、そのまま画中にモチーフとして登場しています。本誌の発行年月と制作時期も合致し、原本のページ上部に青色の絵の具が付着している

ことから、この写真が《画室A》の図像源である可能性が高いと考えられます。これまで知られていなかった作品誕生の背景が初めて明らかになりました。

蔵書の中には『みづゑ』以外にも『芸術新潮』や『美術手帖』が確認されており、日勝作品におけるイメージ形成の問題を探る貴重資料として、今後より入念に調査を進めていきます。

*1神田家にアトリエが増設されたのは1967年10月。

*2『神田日勝作品紹介(Ⅱ)』『神田日勝記念美術館だより 第25号』(神田日勝記念美術館、2008年)



図1.《画室A》1966年 当館蔵



図2.図像源と思われる写真
「『フォト・インタビュー』山口薫より
『みづゑ』736号1966年6月 美術出版社

感想ノートより

2017年5月6日

TVで観た時からいつか行きたいと思って今日やっと来ました。自分は絵をかきませんが、父母の開拓を幼い時にみてきた頃と重なる生活感がありました。絵の馬の目をみていると、なにか語りかけてきているようで涙がにじんできました。

来ることが出来て本当によかったです。

2018年1月14日

今日はじめて来ました。神田日勝は若くして亡くなった方ですが、馬の未完成の絵を見たとき、絵に人生をかけていたんだと思いました。自分も何か人生をかけたいと思えるものに出会いたいと思いました。どの作品も力強く描かれていて印象に残っています。神田日勝さん、ありがとう。

2017年7月7日

清水町在住の者ですが、また訪れてしまいました(4度目)。初めて訪れた時は、まだ何も感じられないでいました(20歳の頃…20年近く前のこと)。それが、訪れる度、歳を重ねるごとに、発見がある、深くなっていく…不思議ですね…。今日は、初めて「死馬」を観ました。しかも「牛」(自分が1番か2番かに好きな絵)と隣り合って並べられていることにすごく意味…意図を覚えました。そして、一番、理解できないでいた「人と牛」「人間」などのシリーズ。今回それらがメインだとのことで、あえて足を運んだのですが、こうして取り上げてくださったことで、今までと真逆の感じ方が出来、このシリーズとの距離が縮まりました。次に訪れる時、今度はどんな発見があるか楽しみです。

2017年7月28日

結婚記念日に、この美術館を訪れることに決めました。神田さんの作品に触れて、互いに思った、感じたことを話し合うことができました。

胸を打たれる色づかいでした。

子どもワークショップ

夏 夏休み子どもワークショップ
「琥珀を作ろう！」

講師／乙幡 康之 氏、宮崎 七奈衣 氏
(ひがし大雪自然館 学芸員)

8月9日(水) 鹿追町民ホール
参加人数：34名

まずは、粘土で型(星やハート、しずく型など)をつくり、そこに熱して溶かした松ヤニを流し込んで、冷え固まるのを待ちました。中には、液状の松ヤニに小さな羽虫を入れ、本物の琥珀のように仕上げる参加者も見られました。それぞれ完成品を手を、透明感のある琥珀の輝きや清らかな手触りを楽しんでいるようでした。



冬 冬休み子どもワークショップ
「犬のペン立てを作ろう！」

講師／三上 慶耀 氏(日本工芸会)
江口 敬生 氏(陶芸工作館職員)

1月11日(木) 鹿追町民ホール
参加人数：20名

今年の干支「戌」にちなみ、鹿追焼きのペン立てを作りました。拳ほどの粘土の塊から、慣れないろくろ台を回し、指や手のひらを駆使しながら、円筒状の容器の形をつくりあげていきました。粘土の状態では無愛想な印象でしたが、釉薬が塗られたのち窯で焼くと、鹿追焼き独自の柔らかな白色と艶感が出て、良い仕上がりになりました。



春 春休み子どもワークショップ
「馬の蹄クッキーに絵を描こう！」

講師／伊藤 明美 氏(鹿追町食生活改善推進協議会)
3月29日(木) 鹿追町民ホール
参加人数：19名

日勝さんの馬の絵にちなんで、実物大の蹄鉄型のクッキーに彩色(トッピングとデコレーション)を楽しみました。数種類のカラフルなクリームを駆使して、個性豊かな作品が誕生。自分でも生地から型を抜いてクッキーを焼き上げ、彩色してオリジナルのクッキーを仕上げました。参加者からは満面の笑顔がこぼれていました。



子ども芸術鑑賞ツアー

11月3日(金・祝) 足寄動物化石博物館
参加人数：11名

今年は当館と同じ十勝管内の博物館施設として、足寄動物化石博物館を見学しました。

足寄動物化石博物館では、同館の新村龍也学芸員による解説を聞きながら、足寄で発見された動物の化石標本を観覧しました。子どもたちは動物についての生態や誕生した時代に関する質問を投げかけ、理解や関心を深めました。

また、ティラノザウルスやアンモナイトなどの古生物模型作り体験を行いました。



水彩画教室

講師／高橋 幸男 氏
(高橋幸男&ジョンナサン絵画教室講師)
参加人数：延18名

①2月22日(木)
②2月26日(月)
③3月 8日(木)
④3月12日(月)



2月と3月に計4回の水彩画教室が開催されました。講師が持ってきた果物や野菜、魚、落花生、硝子瓶などから絵のモチーフを選び出し、「見たまま感じたまま」に静物画を描きました。

「他人と比較せず、楽しみながら絵を描くことで上達する」といった講師の教えのもと、参加者のみなさんは、立体的にも描く方法や絵具の塗り方のアドバイスを受けながら、思い思いに静物画を描き上げました。

出前講座

鹿追町内の小中学校を訪問し、出前講座を行いました。

- ①5月17日(水) 鹿追町立瓜幕中学校 中学1年生 10名
神田日勝の生涯と代表作をスライドで紹介したのち、「馬の絵作品展」にむけて、過去の同展上位入賞作の実物を見ながら構図や色彩の独創的な表現を学びました。
- ②8月24日(木) 鹿追町立笹川小学校 全学年(小学1年生~6年生) 10名
神田日勝と同じく笹川小学校OBである小林館長が、当時の笹川の様子や幼少期の想い出、現在の美術館長という仕事に対する想いについて講演を行いました。

アートキッズクラブ

- ①5月13日(土) 参加人数45名
「反射材をつかってキラキラ☆
リフレクター(キーホルダー)をつくろう！」
- ②6月24日(土) 参加人数21名
「これでキミもおそうじ名人!!
毛糸がほうぎに大変身」
- ③7月23日(日) 参加人数25名 「よくとぶロケットを作ろう」
- ④12月2日(土) 参加人数14名 「みんなのツリーを作ろう」
- ⑤2月17日(土) 参加人数10名
「はんこで色々なものをリメイクしちゃおう」

